

そだちのねっこ

～乳幼児期の遊びより～



教育センター所報
8月号掲載

「納豆巻き、つくりたい！」 ～子どもの「やりたい！」を遊びに取り入れるわけ～

6月18日(火)、3歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

魅力的な『おすし屋さん』や『アイス屋さん』で遊ぶ子どもたちがいました。

保育者:「いちごのアイスください」「Bちゃんは何味する？」

B児:「これにする!」(指で伝える)

保育者:「オレンジのアイスやね。先生、オレンジ味も好きやわ」

A児:「わかりました。これはどちらにしますか？」

(カップかコーンかを聞く)

保育者:「じゃあ、先生はカップにします」「Bちゃんはどうする？」

B児:「こっち!」(コーンを指さす)

保育者:「Bちゃんはコーンでお願いします」

A児:「はい、どうぞ!」



『おすし屋さん』では、店やになりきれ帽子をかぶったC児が「買ってもいいよ～」と小さな声で呼びかけていました。

保育者:「おすし、ください」「この赤いのはなんですか？」

C児:「これです」(写真を指さしをする)

保育者:「あっ、まぐろですね」

C児:(うなずく。皿におすしを乗せて渡す)

保育者:(食べるマネをして)「おいしいです!おすし、大好きなんですよ～」

C児:(にっこりと笑う)「これは納豆巻きやねん」

保育者:「納豆巻きか～、おいしいよね」

C児:「納豆巻き、好きやねん」



どちらのエピソードともお店やさんになりきっているけど、言葉だけでは伝えきれないことや、やりとりが成立しないこともあります。言葉でのやりとりを楽しむ前段階として、「なりきること」「やりとりを楽しむこと」が大事になります。そのために、遊びのイメージや共有できる視覚環境を整えたり、与えられたもの

で遊ぶだけではなく、簡単に自分でつくることができる素材を準備したりします。言葉だけではなく、気持ちを伝えるための意志表出ができる環境が整っていることで、遊びを楽しめていたと思えました。また、子ども同士では続かないやりとりを、お客として一緒に遊びを楽しむ保育者の存在も楽しくなる要因の一つだと思えました。このように、子どもの「やりたい!」を実現させ、「話がしたくなる」「遊びたくなる」「やりとりがしたくなる」などの気持ちの変容を見逃さずに、保育実践することが子どもたちの育ちにつながっていきます。

もうすでに、「ポテトも売りたい」「〇〇も売ったらどう？」などの声も上がっているようで、なんでも売っている『スーパー』ができるかも…と、今後の遊びの展開に保育者もワクワクしていました。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】では、『社会生活とのかかわり』『健康な心と体』『数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚』『言葉による伝え合い』に大きくつながるエピソードです。

今後、この遊びが発展することで、『自立心』『協同性』『豊かな感性と表現』にも関連していくと思えます。

